



TITLE:

漢代あなぐら考

AUTHOR(S):

水野, 清一

CITATION:

水野, 清一. 漢代あなぐら考. 東洋史研究 1942, 7(2-3): 110-114

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138837>

RIGHT:

漢代あなぐら考

水 野 清 一

蒙疆萬安の北沙城で漢代の墳墓を發掘したところ、はからずも附近で漢代の堅穴に遭遇した。それはおそらく貯藏用のあなぐらであらうことをある席上ではな

したら、さつそく内田吟風君より『齊書』か何かに北魏があなぐらを使用した記事がある、北魏のではないかと教へられるし、外山軍治君よりは『雞肋編』にあなぐらに關するくはしい記事があることを注意された。

『齊書』卷五七魏虜傳の記事は北魏の諸王大官が牧畜農耕などの産業をいとなみ、むやみに貨利を追求したことを記し

「太官は八十餘窖をもち、窖には四千斛もはいる、穀と米とを半々にする」

といつてゐる。つまり、南朝の記録には、北魏が北支

那において窖をもちゐ、米穀を貯藏したとつたへてゐるのである。それにしても一窖に四千斛、いまの四百石もはいるといふのであるから、さうたうに大きな窖もあつたらしい。

宋の莊綽の『雞肋編』（琳琅秘室叢書所收）卷上に

は、

陝西の土地は高燥で、積土の縞はみな堅にとほつてゐる。官倉に穀物をつむにもなにも藉かぬ。小麦をもつとも困難とするが、二十年の久しきに至つて一粒も虫にくはれるものがない。民家はたゞ田野のなかに窖をつくつてゐる。地を掘つて井の口のごとくし深さは三四尺であるが、下は蓄穀の多寡によつてまはりをはるげる。土は金色のごとく、すこしも砂石をふくまぬ。火で焼いて、草の紐なわをつくり四壁に釘づけにする。こゝに穀物をいれ、多いものは數

千石に至る。久しければ久しいほどよい。土でその口をつめると、その上に禾黍を植ゑても、前よりもよいにそだつぐらゐである。たゞそこをたゞくと音がし、雪はとけやすい、それでその位置はわかる。西夏が國境に侵入してくると多くあばかれるが、こちらの軍も敵の方にはいればまたもつてこれをさがすのである。

といひ、さらに語をついで南方の卑濕にして貯藏の困難なことをのべてゐる。これには、ある場合ぢかに糧穀を藏したこと、またある場合には土壁を焼き桑稗の防壁——おそらく濕氣をさけるために——をつくつたことがみえる。土壁を焼いたのは一應濕氣をのぞくためでもあつたらうか、また土壁を固定せしめるのに役立つたものとおもふ。われ／＼發掘の堅穴にも灰の薄層がいたるところで指摘されたとともに、それにより床なり壁面の硬化した部分もみとめられたのである。

この記事によると大きな数千石におよぶものがあつたらしいが、われ／＼の堅穴にはそんな大きなものはなかつた。最大のものが高さ三メートルあまり、底徑三、四メートル、口徑二メートルあまりであつた。た

だ深さは三、四尺といつてゐるから、すこぶる相ちかしい。そしてこれを土で蓋し、その上は平常耕作に使用してさしつかへがなかつたものらしい。しかもその末尾の文でわかるごとく、北方地區では宋側でも西夏乃至金側でもかういふ貯藏法をもちゐたもので、その當時北支那の一般の風習であつたことがわかる。

しかし、あなぐらのことは、かならずしも宋代、北魏にかぎらず、漢代においても、北支那においてはふつうのことであつた。許慎は「害は地の藏なり、穴に従ひ、告の聲なり」(『說文解字』害の條)といひ、服虔は「害は穀麥を藏するなり」(『通俗文』逸文)といひ、鄭玄は「害を穿つとは地に入れるなり、隋を害といひ、方を害といふ」(『禮記』月令、仲秋の條)といふ。

鄭玄にしたがへば、われ／＼の發掘した圓形の堅穴は正しく竇とよばれなければならぬが、しかし、ひろくいへばみな害である。しかも、これらの説明はいづれも古文獻の解釋にあたつてくだした文句である。それゆゑ、害をつくり糧穀を藏する風は漢および漢以前より傳承したものとみとめられる。

われ／＼の發掘した萬安北沙城の堅穴が漢代のものたることについては、そのなかに落ちこんだ土器片によつて證據だてられる。

(イ) もし、堅穴が漢代よりはるかに古いものとする

れば、漢代の土

器片が落ちこむ

までに多少とも

土が落ちこんで

ゐなければなら

ぬ、いまみるや

うに底に密接し

て出土するのは

解しがたい。

(ロ) またもし、

堅穴が漢代よりはるかに後のものとすれば漢代の

土器がかやうに落ちこんでゐるのはおかしい。

それであるから、漢より古くもなく、漢よりも新しく

ない時代、つまり漢代の窖であるとおもふ。

またこれを貯蔵用堅穴とする理由は

第一、小さいから住居址であるまい。
第二、焚き火のあとがない。うすい灰層は一様にあることがあるが。

第三、底に固着した遺物といふものがない。みな上から落ちこんだものばかりである。

しかし、糧穀を

藏したといふのは

別に證據がない。

たゞ文獻にたよる

ばかりである。

今西春秋君の

「滿洲あなぐら考」

(紀元二千六百年

記念史學論文集所

收)をみると入關

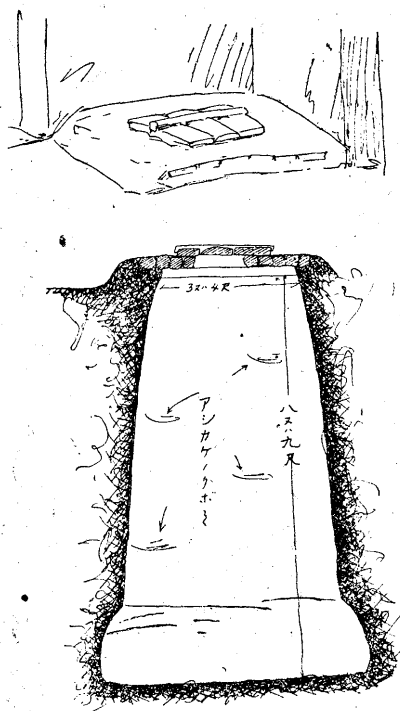
前の滿洲族はオエとよぶ窖をもつてゐて、これにはや

はり糧穀を藏したもののらしい。漢代の窖と一致する。

蒙疆、および北支那にはいまも窖がある。第一圖は

その一例であり(土人はこれを窖とよんでゐる)、屋宇

のもとにあつたり、内庭にある。田野のなかにもあるも

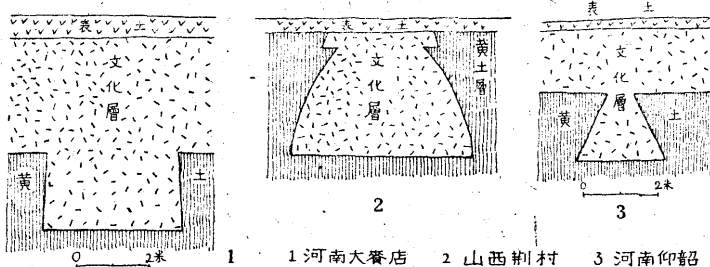


第一圖 現代蒙疆窖 (萬安北沙城)

のは知らぬ。また、こゝに藏するものもつねに馬鈴薯白菜等であつて、穀物を貯藏したものは知らぬ。それでは、いつたい、穀物はいまどこに貯藏してゐるのであらうか。またそれでは漢代の窖は野菜類を貯藏しなかつたか。かういふふうにかんがへてゆくと、まだわからぬことが多い。

近年の發掘によると、

アンデルソン博士は河南仰韶の彩文土器遺蹟において、たぐさんの堅穴を發見し、董光忠氏は山西萬泉荊村において、劉昭氏は河南濬縣大賚店において、徐炳昶氏は陝西寶雞關雞台において發見した。そのうち、荊村の堅穴だ



第二圖 先史時代窖三種

けはやゝ大きいので、董光忠氏は堅穴住居といふふうにかんがへてゐるが、わたくしはやはり窖であらうとおもつてゐる。

1、河南濬縣仰韶

多數 底徑一・九—二・八 深〇・五—一・九

(J. G. Anders on; *An Early Chinese Culture*,

pp. 21—26)

2、山西萬泉縣荊村

多數 底徑八 深三米位

(董光忠「山西萬泉石器時代遺址發掘之經過」師

大月刊第三期、一〇二頁)

3、河南濬縣大賚店

口徑一・七 底徑二 深一米位

(國立歷史語言研究所田野考古報告、第一冊八一

頁)

4、陝西寶雞縣關雞台

深一米位

(同)

これら遺物の形式關係は微妙であるし、だいたいをいへば、仰韶、荊村は彩陶文化期、大賚店は黑陶文化

期とかんがへられるが、遺物と堅穴との関係もまた微妙であるので、はつきりした前後はいへぬ。しかし要するに新石器時代の末期であることには間違ひないか

ら、北支那の害も古くは石器時代にさかのぼり、そして新しくは現代にまでおよんでゐるものといふことができよう。